

勝願寺住職としての順性

茨城県猿島郡総和町磯部の勝願寺(真宗大谷派)の伝によると、順性はこの寺の第4代住職になったという。勝願寺は「二十四輩」の寺には入っていないが、中世後期には真宗関東七大寺の一つに数えられ、磯部御坊と言われていた。この寺を中心とする真宗門徒のことを磯部門徒と称することもある。開基は親鸞の高弟である善性である。

寺伝では善性は北信濃の豪族井上氏の一族と言われる。善性の出身については異説もあり、新潟県上越市の浄興等の伝によれば、後鳥羽上皇の皇子であるという。茨城県結城郡石下町の東弘寺も善性が開いた寺であり、こちらの伝も浄興寺と似ている。

善性(57歳、延応巳戌元年8月12日遷化)勝願寺開基即善性(光世)、聖人師資の為に職于明性に伝え、奥州浄光寺を建立す。其の女を善海に妻せ、相続す。

明性(満盛の男忠長なり、聖人の師資の為)

如慶尼(順性の姉なり)順性、始め弧なり。如慶尼之を育て長ず。旧号明慶尼。

蓮如上人追って諱を賜う。

系図によれば、善性は延応元年(1239)に57歳で亡くなったことになっている。この善性の名を真宗史で高からしめているのは、親鸞の書状を集めて編集する仕事を最初に行ったことである。三重県の専修寺に伝わる『善性本御消息集』がそれである。袋綴じの表紙に『御消息集・釈善性』とあり、これを入れた紙袋に別筆で、

御消息集一冊、飯沼善性房筆、(中略)顕智様、上塘一枚、(中略)御所持顕智上人(下略)

などがある。字体の古さから判断して、親鸞の在世中か、没後間もない頃に成立したものと推定されている。親鸞の没年は弘長2年(1262)である。善性の没した年については、他の説もある。

勝願寺第2世の明性は、親鸞自筆の坂東本『教行信証』を横曽根の性信から「譲り預けられた人として知られる。同書『化巻末』の奥書に、

弘安陸癸未二月二日、釈明性讓預之、沙門性信(花押)

とある。

勝願寺第3世の智光は、弘安3年(1280)12月25日の覚信尼の「大谷廟堂敷地寄進状」を預かった人物である。

此内、(中略)一通者弘安3年10月25日飯沼善性房子息智光坊併善性房同朋証信坊兩人之中へ於大谷坊被出之候」

とある智光である。

他方、上越市の浄興寺の寺伝によれば、この寺は親鸞の稲田草庵を受けたもので、弘長3年(1263)小田泰知の兵火にかかり、一時猿島郡磯部に移り、後に信濃国に移ったという。勝願寺の伝の一つにも、同じく弘長3年に兵火にかかって烏有に帰したとある。浄興寺の住職の歴代は、

親鸞(承安3年・1173～弘長2年・1262)

善性(正治元年・1199～文永5年・1268)

善海(承久3年・1221～弘安5年・1282)

専海(正元元年・1259～文保2年・1318)

となっている。さらに勝願寺の系図では、浄興寺第3世の善海は善性の娘婿であり、浄興寺の系図では「浄光寺」は、最初、奥州に建立されたことになっている。

以上から判断すると、勝願寺と浄興寺とは成立は別でも、一時磯部において同一寺院として存在していた時期があったと考えられる。やがて浄興寺は信濃へ移り、勝願寺が再び独立の寺院として経営されるようになったということであろう。

当寺開基善性房は(中略)、聖人に謁し御弟子となり勝願寺を建立せり、しかるに善性房当寺を明性房(善性房の舎弟にて聖人の御直弟なり)にゆずり、その身は奥州へ下り、女子を儲て善海房(聖人の御直弟なり、古陸奥義家公の孫

にて井上九郎満盛公の子なりと)配嫁して信州浄興寺を起立せられ、善海房へこれをゆづられけりむ云々。

とある。

順性が勝願寺に入った事情を、『真宗大辞典』では、勝願寺は、

弘長3年(1263)兵火に罹って烏有に歸したが、鳥栖無量寿寺の順性は寺を順慶に譲りて、勝願寺を再興し自ら該寺の第3世となった。

とある。順性が勝願寺再興のためにに入ったとしても、弘長3年の火災直後ではあるまい。前述のように弘安3年(1280)には智光が、同6年には明性が、それぞれ活躍していることはわかっているから、それ以後であろう。

それにしても『勝願寺系図』に順性には姉の如慶があり、彼女は孤児になった順性を育てたとあるのは、何を意味するのであろう。無量寿寺側にはこれらに関する記録はない。少なくとも弘安5年(1282)11月24日まで順信が活躍していたことは西本願寺蔵の「信海(順信)書状」で明らかである。

順性が確実な史料に現われるのは、正安4年(1303)4月8日の「門弟等連署状」である。彼のこの時の年齢は10代以降であろう。鹿島門徒を率いている気配から、常識的には壮年あるいはそれ以降である。延慶2年(1309)7月19日(「青蓮院下知状」)以後ははっきりしない。『存覚一期記』元亨3年(1323)の項に、「鹿島順慶」等が鹿島門徒として久しぶりに連絡してきたとある。すると延慶2年から元亨3年の間ころに順性は順慶に無量寿寺を任せ、勝願寺の再建に乗り出したということであろうか。

『無量寿寺系図』によると、同寺第3世の順秀は延元元年(1336)に56歳で亡くなっている。順性の活動時期とまったく重なる。そして延元元年に没ならば、順秀の誕生は弘安4年(1281)ということになる。順信は翌年の弘安5年までは生存していた。順性(しょう)こと順秀(しふ)とは発着が似ているので、両者は同一人物とも考えられるのではないだろうか。

そこで、順性の系譜につき、左記の2通りの可能性を提示したい。第一は、順信の再晩年の子である順性は、幼時に両親を失い、姉の如慶尼に育てられた。この間、無量寿寺は随信が代わって寺務をみて、成人の後の順性に譲った。このような考え方である。第二は、順性を順信の子とするには年齢的にやや無理がある。常識的には孫であろう。そこで『無量寿寺系図』によって随信を父とみなし、何らかの時期に姉に面倒をみてもらったとするのである。また同系図によって、順性16歳の時に父を失ったとする。

以上、無量寿寺の伝と勝願寺の伝とを重ね合わせれば、順秀とも表記された順性は、唯善問題や覚如の大谷廟堂留守職就任問題が片づいた後、無量寿寺を子の順慶に譲って勝願寺に入り、同寺の復興に努力し、延元元年(1336)2月18日、56歳で亡くなった、と推論することができよう。(今井雅晴)